

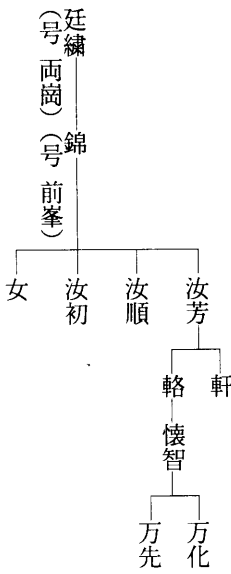
# 羅近溪講学紀年考 (一)

佐野 公治

明代の思想家、羅近溪の事蹟について、とくに講学活動に重点をおき、年次的に記述する。

注には本文記述の考証、当時の講学活動状況などについて論述する。

羅近溪、諱は汝芳、字は惟徳、号は近溪、明徳先生と称される。正徳乙亥十年（一五一五）五月二日、江西、建昌府南城四石溪に生れる。<sup>1</sup>



一歳 正徳乙亥十年

南城县四石溪に生れる。

父、錦二十六歳、母、寧氏二十五歳。家系は祖父の廷績以前は未詳。錦は県学の生員。隣県の撫州府臨川の人で王陽明の学を伝えたという饒行斎や、崇仁の廖東湖に学んだことがある。寧氏は当地の有力な一族であつたらしく、羅氏とは姻族である。

五歳 己卯十四年

母より『孝経』の誦読を授かる。<sup>3</sup>

七歳 辛巳十六年

郷学に入る。

十三歳 嘉靖丁酉六年

字学を学ぶ。

文字の筆写は科挙むけの勉学の一端であるが、書の鑑賞、文房用

具の愛玩は、近溪の生涯を通ずる趣味となった。<sup>4</sup>

十五歳 己亥八年

挙子業を学ぶ。

十五歳で誦読をはじめ、十五歳で本格的に科挙むけの学習、挙子業を学ぶのは、当時の平均的な課程である。授業の師は隣県の新城の人、張洵水であったという。<sup>5</sup>

十七歳 辛丑十年

呉氏を娶る。

薛瑄の語録を読み、澄然湛然の心体を完全に得ようとし、功過を日々に記録して内省する。<sup>6</sup>

明代初期の朱子学者、薛瑄(諡は文清)の語録『読書録』は、純粹な心境にむけての内省の修養を説き、当時に読まれていた。功過を記録して、人格性を涵養することは知識人層にも行われていた。<sup>7</sup>

十八歳 壬辰十一年

城内臨田寺に籠り、机上の水盆を鏡として面影を写し対坐する。精神の煩悶は続く。<sup>8</sup>

父より『伝習録』を授かり、これを読んで病はやや好転する。功過の日録や水鏡に面影を写す修養法は、道教の一派、浄明道にもある。<sup>10</sup> 近溪は道教との関りをもち、二十六歳の顔鈞との出会いの

ころにも水鏡の修養を続けている。後年にはその二子は浄明道の流れを引く道士に傾倒する。

二十三歳 丁酉十六年

県学の生員となる。<sup>11</sup>

長子、軒生れる。

提学使の職にあって生員を選抜したのは、嘉靖末年に宰輔となつた徐階である、試験官と学生とが師弟のつながりをもち、党派の勢力を形成することがあり、後年、徐階は近溪の官僚生活に関わりがある。だが、近溪には党派の勢力を利用して政治的な野心を抱いたり、上官に倣ったりすることはない。官僚としては清官派といつてよく、これはその社会的行動をみる上で看過できない点である。<sup>12</sup>

二十六歳 庚子十九年

郷試受験に省都の南昌に赴き、「心の病いを緊急に治療します。急救心火。」との榜を掲げた顔鈞<sup>13</sup>と答問し、心服して生済の師とする。

顔鈞、号は山農、江西の吉安府、永新県の人。父や兄弟は知県や県学の教官、生員の経歴をもつが、顔鈞は庶民として生涯を送る。徐階を通してその師王良にも学ぶ。王良に始まるいわゆる泰州学派の思想圏にあり、信従しない相手には面罵をも辞さない、自己宣伝癖の強い、積極思考の持ち主であった。<sup>14</sup>

有名なこの両者の出会いは、近溪の回憶では郷試下第後のことであつた。「先には危い疾を患つても生死に心を動かされませんでしたし、いま科擧に失敗しても得失に心を動かされることはありません」といふと、顔鈞は承服せず、「それは欲望を制圧しようとするもので、仁を体得したことはない」といふ。「私欲に打ち勝つて天理に復帰するのであり、欲望を制圧しなければ、どうして一挙に仁を体得できましようか」といふと、顔鈞は、「君は孟子が四端を論じたのを知らないのか。すべてを拡充することを知れば、火が始めて燃え、泉が始めて流れるのと同じことだといっているのだ。このように仁を体得すればなんとも手取り早いことではないか。だから君は当下に日毎に用いていながら気がつかないことに心を配るべきで、天性の生生のあり方が休止することがあると疑つたりしてはならないのだ」といふ。

このときに夢から醒めたように感じて師事することになった。後の郷試に合格したあともまだ釈然としなかつたが、三年後の一夕、忽ちに悟るところがあつた、といつてゐる。<sup>15</sup> 顔鈞も細部を除けば、ほぼ同じ内容のことを彼一流の筆致で述べてゐる。<sup>16</sup>

心火とは、ここでは広く精神上の煩悶、神經を病むことを指すとみてよからう。この掲榜によつて信従する者が千五百人あつたと顔鈞がいうのは、独自の誇張を含んでゐるとしても、当時には精神的な悩みを抱く人びとが多く居たことがわかる。王守仁の精神遍歴、わが心そのものが真なる価値をもつとする龍場での覚睡はよく知ら

れてゐる。近溪は、私欲を克去して不動の静なる心境を得ようとする方向にむけた、宋学的朱子学的な修養を目指してゐたのに対して、顔鈞の教示は、生生流行する天性が自己に具在するとみる、王守仁から王良、泰州学派にとくに明瞭にみられる思想に立脚してゐる。<sup>18</sup>

講学とは、学問を講授し、相互に講究することを意味するが、当時の講学活動は、精神修養を目的とするものから、親睦交遊に重点があるものまで、幅広い内容をもつてゐる。しかし、当時には人間はいかに生きるべきなのか、学問はいかに人間形成に資するののかといった、学問的精神的な欲求が底流にあり、このような欲求が、講学活動を支えるひとつの力となつてゐたと思われる。その欲求は、人はいかに生きるかという哲学的な問から、いかに生命を保持するか、端的にいえば、いかに死を超越し生命を存続させるかという生物体としての人間にとつての生々しい切実な問いをも含む。この広い意味での人間における生は、当時の用語では「性命」<sup>19</sup>といつてよい。講学の大きな目的を性命の探求、性命の学とすることは、嘉靖期の講学運動の中心的存在でみる王畿にとくに強くみられるが、近溪の講学においても性命は大きな問題関心になつてゐる。<sup>20</sup>

二十九歳 癸卯二十二年

郷試に挙げられる。

南昌の滕王閣に会集。

二子輅生れる

同年に郷誼に挙げられた胡直たちとともに名勝の滕王閣に会集する。<sup>21</sup>

胡宗正に易を学ぶ。

三十歳 甲辰二十三年

会試に挙げられる。

北京に滞在中の顔鈞や友人とともに、靈濟宮に会同。

秋の終りに、顔鈞とともに秦州の安豊場に王良の祠堂を訪ね

て講学。<sup>22</sup>

三十五歳 己酉二十八年

三十一歳 乙巳二十四年

郷里の南城に従姑山房<sup>23</sup>を建てて講学。

三十六歳 庚戌二十九年

南京における王畿、錢徳洪の講会に参加しようとして果さず、

秋に南昌に大会し、吉安の講会に参加。

三十二歳 丙午二十五年

隣県の宜黄に講学。<sup>24</sup>

た(「墓誌銘」)。近溪は時の講学派と広く交流していたのである。<sup>27</sup>

三十三歳 丁未二十六年

吉安府に顔鈞を訪ね、府下の講会に参加。

数十人とともに吉安府に赴き、顔鈞の居る永新県を訪れたのち、

府下に鄒守益・聶豹・羅洪先なども列した数百人の集会に参加した。

顔鈞に従学したことがある何心隱も参会している。近溪は近ごろの

心境を尋ねられて「無ということ」と答えている。<sup>25</sup>

三十四歳 戊申二十七年

同門にもみられる学説の相違を超えて同志の士の結合を図るところ

にあったと思われ、当初は定期の開催を予定していたが、このとき

もいべき、講学史上画期的な講会であった。王畿たちの意図は、

江西、安徽を中心とする江南の陽明学派が集う、広域の連合大会と

同じ陽明門下の盟友錢徳洪とともに旅途に上り、吉安の青原書院<sup>29</sup>・復

古書院に講会し、次年、安徽、寧国府下、水西書院に講じ、さらに

江西、貴溪県の龍虎山冲玄観<sup>30</sup>に大会を開催する。この大会は浙江、

山西、安徽を中心とする江南の陽明学派が集う、広域の連合大会と

限りで終っている。その後にも王畿は浙江での陽明ゆかりの天真書院などでの講学にも意を注ぎながら、それにも増して安徽の水西書院や徽州府下の諸書院に出講し、さらに南京地域や、江西では吉安府下にも出講した。もっとも長く旅途にあった三十三年をみると、浙江から安徽、江西の廬山、湖北、江西、広東、江西と回り、浙江に帰るまで、ほぼ年間を通して周遊している。

三十七歳 辛亥三十年

隣府の樂安県、宜黄県の講会に参加<sup>34</sup>。  
郷里でも講会を催した<sup>35</sup>。

三十八歳 壬子三十一年

三十九歳 癸丑三十二年

殿試に応じて合格<sup>36</sup>。

徐階、歐陽徳、聶豹、程文徳たちによる靈濟宮の講会に、多数の同年や知友とともに参加<sup>38</sup>。

六月、安徽、安慶府太湖知県となる<sup>39</sup>。

太湖知県として三年の任期中、民を教化し、優れた治蹟があったと評される<sup>40</sup>。また性命の学を講じて、道学先生と呼ばれた<sup>41</sup>。

四十歳 甲寅三十三年

四十一歳 乙卯三十四年

四十二歳 丙辰三十五年

勤務成績査定のために入京<sup>42</sup>。

顔鈞とともに徐階主催の靈濟宮講会に列席<sup>43</sup>。  
刑部主事に陞任<sup>44</sup>。

この頃、胡直耿定向などと交わる<sup>45</sup>。

四十三歳 丁巳三十六年

四十四歳 戊午三十七年

靈濟宮の講会に参加<sup>46</sup>。

このころの談論では、經書の常套語に言及するのを見ると、棒喝を用いる禅者さながらに叱りつけたという<sup>47</sup>。

四十五歳 己未三十八年

四十六歳 庚申三十九年

大同、宣府の獄に赴く<sup>48</sup>。

帰途、山東の臨清で発病し、泰山丈人の教益を蒙る<sup>49</sup>。

四十七歳 辛酉四十年

任期満了して帰省。<sup>50</sup>  
 学徒と集会する。<sup>51</sup>

四十八歳 壬戌四十一年

北京に在り、士友と談学。<sup>52</sup>

安徽、寧国府知府に陞任。<sup>53</sup>

二子、軒・輅は道士胡清虚に師事する。

寧国では郷約を行い、<sup>54</sup>行政実務に手腕を発揮したほか、郷紳や学生とともに盛んに講学する。<sup>55</sup>

胡清虚は浄明忠孝道の道士、王畿の師でもある。二子は胡に師事して傾倒し、やがて道士にも似た生活に入る。<sup>57</sup>

四十九歳 癸亥四十二年

耿定向、寧国に至る。<sup>58</sup>

この頃何心隱の訪問を受ける。<sup>59</sup>

五十歳 甲子四十三年

志学書院を建設。<sup>60</sup>

王畿を迎えて講学する。<sup>61</sup>

この頃、仏教に近い言説があったと評される。<sup>62</sup>

五十一歳 乙丑四十四年

勤務成績査定のために入京するのに先立って、南京に講学。<sup>63</sup>  
 入京して靈濟宮に大会を開催。<sup>64</sup>徐階の教言を敷衍講説して「靈濟宮会語」を著す。

寧国に帰任したのち、父の訃報に接して帰郷。

(以下続稿)

## 注

1 家系図は「先府君前峯行状」(『羅明德公文集』卷四、以下『文集』と略称)などによって作成。以下、拙稿「羅近溪の人物像(一)(二)(三)」(愛知県立大学文学部論集四〇、四二、四三号)を参照。ただし記述を改めた点がある。

『中国歴代年譜総録』(北京図書館出版社)に、近溪先生譜系履歴実録

一卷 闕名撰とあるが未見。

2 寧氏については「先母寧安人墓銘」(『文集』卷四)などを参照。

3 当時の幼時からの学習については、拙著『四書学史の研究』第一章を参照。

4 対談が作字書法に及んだときに、つぎのような感慨を述べている。

「私はそれをひどく好む性質で、教えを乞うた名家は国中に及ぶほどであった。また夢うつつの中で王羲之から文房四宝を授けられるのを実際に見たが、それらはみな宝玉の珍宝で光りを放って明るく耀き、今になっても胸底に残っている。余以性情酷好、其請益名流、殆徧海内。且夢寐恍惚、親見右軍授之文房器具、皆琬琰琪珍、精光照耀、迄今心目猶在。」(『文集』卷四「二子小伝」)。この夢は、文房四宝についての眼識を得たのちの経験であろう。『文集』巻首の「本伝」に、この夢を十三歳に係けるのには従わない。

5 「從新城張洵水先生」(楊起元撰「明雲南布政使司左參政明德夫子羅近

溪先生墓誌銘」、「近溪子集」附集卷二所収。以下「墓誌銘」と略称。

〔從新城張洵水先生受学〕（『盱壇直銓』下）

なお、本稿での年次の記述は「墓誌銘」および『盱壇直銓』下に依ることが多い。後者は近溪後年の門弟曹允儒の編に成り、万曆年間に近溪の従弟、汝貞から開いた師の生平行実と自己の見聞をもとにした近溪の事蹟を記し、「墓誌銘」とともに信憑性は高い。『文集』巻首の「羅明德公本伝」は、後人の手に成ると考えられる。

近溪の著述、現存資料については、拙稿「羅近溪資料の刊行史」愛知県立大学文学部論集 国文学科編三十九号をも参照。

6 「祖（近溪）読薛文清語云、万起万滅之私乱吾心久矣。今当一切決去以全吾澄然湛然之体、若獲拱璧、涕淚交流、矢心必為聖賢、立簿日記功過、寸陰珍惜、屏私息念。如是用功数月、而澄湛之体未復。」（『近溪子集』「庭訓上」）

7 拙稿「中国における上帝・鬼神・靈魂観」（中国研究集刊 辰号）を参照。

8 「乃辞去師友兄弟、閉関臨田寺中、頂穴天牕、牕下置浄水、几上置水一盂・鏡一面对坐。踰時俟心与水鏡無二、方展書卷。頃或念慮不專、即掩卷、瞑目而坐、日夜循習為常。比至半載、雖起減少於往昔、而澄湛不付所期。復移居密室、用功益勵。一日恍見一僧。問曰、先生入山、惟恐不深。豈欲行静功乎。居室屢遷、豈静猶未得乎。祖曰、静固未能遽得、睡魔則却去尽也。僧曰、静功出自禅門、習静自有方便。竊視先生、初未遇人命宝。豈宜輕弄。願先生就杖。祖曰、用功一歲、僅僅得此。僧曰、此豈足為効驗、乃火動也。先生不悟死期至矣。祖起謝、不見。此後就杖、果驚悸而難寐、身体壯熱、成重病矣。」（先掲「庭訓」上）

〔置水一盂・鏡一面对坐〕とあるが、「俟心与水鏡不二」とあることから水鏡に面影を写すことをいうとみる。同様の記事は「墓誌銘」『盱壇直銓』下にもある。

9 「前峯公憂之、授以伝習録。夫子読而病瘥」（『墓誌銘』）。「前峯公遂授

以陽明王先生伝習録、指以致良知之旨。師聞之大喜、日玩索之、病瘥。」（『盱壇直銓』下）

しかし完全には治癒しなかったことは後述からもわかる。

10 秋月観暎「中国近世道教の形成」を参照。

11 生員に挙げられた年について、「文集本伝」には「丙申（十五年）、徐存斎（階）取りて臬学に入る」とある。しかし、徐階が学生を選抜する職務をもつ江西按察使副使の任にあったのは、十六年から十八年である。中純夫「徐階研究」（富山大学教養部紀要「四巻一号」）はその点を明かにした。さらに、近溪と深く交際するようになったのは、生員の同年であったことが事の始りであるらしい胡直は、十六年に生員になっている。このことを記したつぎの徐階宛の文章が正確なことは疑えない。「不肖、私は丁酉（十六年）に大臣尊公の門に出て、いま二十年あまりになります。」（胡直『衡廬精舍蔵稿』巻一〇「上徐存翁書」）。ここから近溪が生員になったのは十六年と考える。

12 注1の拙稿を参照。

13 『顔鈞集』（中国社会科学社 一九九六年刊）巻一「急救心火榜文」。顔鈞については、この書によって明かになったところが多い。

14 顔鈞に学んだ陳一泉なる人物は、のちに王陽明の門弟、劉師泉に師事しようとして、顔鈞に面罵された。  
「比壯、從吉永新顔鈞先生遊。顔鈞先生者、泰州王先生弟子也。其学以人心妙、万物不測也、為即性即命、欲以心運世。而頗嘗古儒先、為見聞理道格式竟障道、以自詡為恣睢。先生遊学揚・泰間悅之、從渡淮渡江、從入衢・信越歲矣。尽領解其說。顔鈞先生喟然謂門徒曰、吾与若輩言、從情耳。与惟德言、從性。与本潔言、從心。本潔、先生字、惟德、則大參羅先生字也。盖其学以從心所欲為極致、故高標許如此。当是時、先生尊信顔先生甚久之。中自疑、若已尽其学然、学何從易也。会從西游吉、見安成師泉劉先生。劉先生、王文成公高第弟子也。篤而深。顔鈞先生嘗師事焉。就訊之。……於是先生恍然有省。而夙心旧学、倒囊尽棄、如蕩

長風而濯大波也。明年入辞顔先生、請從劉先生居。顔鈞先生以為背己、怒罵罵之。諸同門爭挽留、則對曰、曩源所為事先生者、学也。今学殊指貌為容、而留事先生。先生以迹不以心、吾不忍為也。竟去從劉先生。鄒文莊公于冲玄広衆中、嘆之曰、若陳子、可謂大勇矣。於去就較然、不欺其志意。豈不毅然大丈夫哉。」(鄧元錫撰「陳一泉先生墓誌銘」、「皇明文海」卷四四五所収)

大參は參政のこと。近溪は雲南左參政となる。吉は吉安。永新は顔鈞の郷里。安成は安福県のこと、劉師泉や後出の鄒文莊、諱は守益の郷里。源は一泉の諱。冲玄は吉安府下の講会処。

近溪が無理難題を仕掛ける顔鈞にひたすら従順に仕えた逸話はよく知られている。

「山農雖以学自任、於言矢口、得過縉紳不少、南刑曹業置之死地矣。先生以身代為之贖、而顔得生全。且顔貧、視先生家若内庫、随取随厭。顔又喜施、与随施尽、又輒隨其所請。先生年已耄、顔怒、先生跪之榻前、顔批其頰、不少動、曙而慰解、始起。夫顔横離口語、学非有加於先生、而終身事之不衰、生之縲綬、周之貨財、事之有礼。此祖父不能必之孝子慈孫、而得之先生。嗟乎、即此天地可格、鬼神可動。」(鄧元標「近溪羅先生墓碑」、「近溪子集」附集所収)

これは近溪側での資料であり、傍若無人な顔鈞に対する近溪の奉仕ぶりが増幅されて伝えられている。ただし、これに似た話は顔鈞側の資料にもある。

賀貽孫「顔山農先生伝」にいう。「先生毫石不羈、輕財好施、揮金如土。見人金帛、輒話曰、此道障也。索之、無問少多、尽以济人。羅公為東昌太守、先生来、呼之曰、汝芳為余制棺、須百金。尽取其俸錢出、即散与貧者。又命之曰、汝芳為余制棺、須百金。太守故廉、不能更具百金、則蚤起、矚其尚寝、跪床下白之。先生話怒、不得已、称貸以進。取之出、又散与貧者。」(「顔鈞集」卷九、附録一)

15 「嗣是科挙省城、縉紳大挙講会。見吉中顔山農先生名鈞、今改名鐸。

芳具述昨遭危疾、而生死能不動心。今失科挙、而得失能不動心。先生復不見取。問之。曰、是制欲、非体仁也。芳謂克去己私、復還天理、非制欲、安能以遽体乎仁哉。先生曰、子不觀孟氏之論四端乎。知皆弘而充之、如火之始燃、泉之始達、如此体仁、何等直截。故子患当下日用而不知、勿妄疑天性生生之或息也。芳時大夢忽醒、乃知古今天下道有真脈、学有真伝、遂師事之。比聯第婦家、苦格物莫曉。乃錯綜前聞、互相參訂、說殆千百不同。每有所見、則以請正先君。先君亦多首肯、然終是不為釈然。三年之後、一夕忽悟今說、覺心甚痛快。中宵直趨臥内、聞於先君。先君亦躍然起舞曰、得之矣。得之矣。」(「近溪子集 統集」二乾)。「庭訓」ではやや長文になっている。

16 年廿六、適赴庚子秋試、未遇。遇耕樵衍講同仁、急救心火。芳聽受二十日夜、言下悟領、鼓躍精神、旨味帰学三月、果獲豁然醒、如幾不可遇者。一日弄筆、瀉文數篇、新異悅人。乃翁究竟何以致。芳曰、此即豫章顔師所伝、児叨際会。翁喜甚、焚香向西南拜謝樵恩、此可以觀父子知信而用服也。次科突卯、果中郷試、甲辰連捷。」(「顔鈞集」卷五「著回何敢死事」)

耕樵は顔鈞の自称。瀉は寫の訛字。乃翁は近溪の父。突卯は庚子から三年後の嘉靖二十二年。

『顔鈞集』点校者は、「言下悟領鼓躍精神旨味帰学三月」の個処に錯置があるとして「言下悟領旨味、鼓舞精神、師学三月」と、「旨味」を「悟領」に後置して校正する。

顔鈞の文章は、「文章表現は文学的でなく、彼が人に与えた書札は三四度読んでも句読が切れない。」(同右附録 近溪撰「掲詞」と近溪がいうように、「顔鈞集」は難読であり、また書写に伴う錯脱を疑わせる個処も多い。したがっていまの個処を校正することもありうるが、原文は、「言下に領悟して、精神は鼓躍した。玩味して帰ってから学ぶこと三月……」との文章とみればよく、他の文章と比較してもとくに改訂する必要はない。『論語』の「子在齊、聞韶樂三月、不知肉味」をふまえ



た表現とみられる。なお、以下にこの書からの引用は句読点を改めたところがある。

ここでは、顔鈞は自身の教示によって、近溪の精神は鼓舞し、作文も上達して科擧に合格できたといわんばかりである。

17 「庚子秋闈、榜告急救心火于江西城、会講在豫章同仁祠中、翁徠徒士類千五百人。」(同右卷一「急救心火榜文」)

18 荒木見悟『明代思想研究』五「羅近溪の思想」を参照。そのような評価は日本では定説とみてよい。中国では旧くは陽明と泰州学派を異質な思想とみる評価があったが、黄宜民氏は陽明・王良・顔鈞に思想上の継承があるとする(『顔鈞集』前言)。

19 性命については、さしあたり溝口雄三『中国前近代思想の屈折と展開』を参照。

20 講学における性命、性命の学に言及した王畿の文をあげておく。

「今人講学、以神理為極精、開口便說性命、以日用飲食声色貨財為極粗、人面前便不肯出口。不知講解性命入微處、一種意見終日盤桓其中、只是口說。縱令宛轉歸己、亦只是比擬卜度、与本来性命生機了無相干、終成俗学。」(『龍溪王先生会語』卷一「冲元会紀」)

「欲究極自己性命、不得不与同志相切劘相親法。同志中因有所興起、欲与共了性命、則是衆中自能取益、非吾有法可以授之也。」(同右卷六「天山答問」)

「吾輩講学、原為自己性命。雖举世不相容、一念炯然。豈容自昧。」(『王龍溪先生全集』卷一一「答張陽和」)

「此生真為自己性命。同心之友、須默約三輩、以求相親之益。若徒混混挨過世界、亦無益也。」(同右卷一一「与張陽和」)

「学原為了自己性命、默默自修自証。纔有立門戶護門戶之見、便是格套起念。便非為自己之実学。」(同右卷一「撫州擬峴台会語」)

王畿を師として、その没後にも水西書院の経営に尽力した查鐸につきの言がある。

羅近溪講学紀年考(一)(佐野)

「朋友關係最大、古人以之合為五倫。今因性命之学不明、故不知友義之重。果能究心此学、自不能不求朋友。故有志之士、一对良朋、自有警醒、不待言語而受益已多。今須共立会期。此会之外、更求同心者、常常相会、善相勸、過相規、疑義相質、難事相処。真有性命相関、一刻不可離之意。」(『闡道集』卷四「書楚中諸生会案」)

近溪の講学にも性命を論じた。性命の語が生命いのちの意を含むことはつぎの文にもみられる。

「羅子令太湖、講性命之学。其推官以為迂也。直指盧囚、推官与羅子侍。推官靳羅子於直指曰、羅令道学先生也。直指顧羅子曰、今看此臨刑人、道学作如何講。羅子对曰、他們平素不識学問、所以致有今日、但吾輩平素講学、又正好不及他今日。直指詰之曰、如何不及。曰、吾輩講学、多為性命之談。然亦虚虚談過、何曾切為著性命。試看他們臨刑、往日種種所為、到此都用不著。就是有大名位大爵禄在前、也都沒幹。他們如今都不在念、只一心要求保全性命。何等真切。吾輩平日工夫、若肯如此、那有不到聖賢道理。直指不覺嘉歎、推官亦肅然。」(『明儒学案』卷三四) 九。師同廬山胡公・洞巖周公及諸同志、大会於滕王閣(『盱壇直録』下)。胡直(号は廬山)が癸丑の挙人であったことは、『衡廬精舍藏稿』卷八「同年章近州補令桐城序」にみえる。周洞巖は未詳。同年の挙人たちによる会遊であり、このような会合は講学資料に頻見する。

22 近溪との再会について、顔鈞はつぎのようについて。「時在甲辰秋。聚同年若干、京仕若干、倡会九月。招徠信從者若譚論・陳大賓・王之誥・鄒応龍等四十七人。」(先掲「自伝」)

同年とは近溪の会試同年のこと。譚・陳は二十三年進士。鄒は三十五年進士。王は未詳、これらは会試同年を含むだろう。

靈濟宮の会であったことは、「墓誌銘」に「举会試、与同志大会靈濟宮」とあるのに依る。靈濟宮については、注29を参照。

顔鈞の「自伝」には右に続いて、「秋尽放棹、携近溪同止安豊場心師祠。先聚祠、会半月。……嗣是翕徠百千餘衆、欣欣信達、大中学庸合衆踴比、大半有志欲隨鐸成造。若師嗣王巽、亦幡然信及及師学脉。有審夫姓韓名權(貞)号楽吾、随從半年、深能默契実力、至今猶卓卓致、百里内無不景從。鐸因留師祠、延会泰州・如臯・江都各塩廠、及揚州・儀真、各住二三月。受心師大成之旨者亦多、但未紀錄姓名、有幾千百衆也。如此流連、逾三年、乃辞師祠、渡江入南都、衆友送別真州、皆号哭而別。」

心師は、心齋(王良)、鐸は顔鈞の別名。

王良の講学に庶民の参加があったことはよく知られているが、これは後年にも継続していた。異色の求道者、鄧豁渠は、二十一年に安豊に王良の嗣子王巽(号は東淮)の講学の盛況をみている、「此日起会講学。陸統来者、知渠是与東淮書的和尚、咸加礼貌。……是会也、四衆俱集、雖衙門書手売銭売酒脚子之徒、皆与席聽講、郷之耆旧、率子弟、雅觀雲集。王心齋之風猶存如此。」(『南詢録』)

渠、和尚は鄧豁渠のこと。与東淮書とは鄧があらかじめ書翰を送っておいたことをいう。四衆はもと仏教語だが、ここでは諸階層のひと。衙門書手は役所の物書き、売銭は物売り、脚子は駕かき。

「自伝」にいう陶工の韓貞の講学は、秋過ぎの農閑期に行われたという(『顔鈞集』附載『韓貞集』所収、耿定向撰「陶人伝」)。いまの顔鈞の安豊訪問には、講学に集う人びとへの配慮がみられる。

近溪はこの年、会試に続いて行われる殿試には応じなかったらしい。これは伝記研究上のひとつの問題点である。これについて「墓誌銘」や『盱壇直銓』下は、父の病いの報を得て帰郷したことを理由とする。しかし秋過ぎまで顔鈞と行動を共にしたことが明かになったからには、別の理由があったことになる。顔鈞はこの点について、「近溪会榜有名、揮勞、確辞殿選、終究農学為出処」(「自伝」という。農は山農、顔鈞の号。近溪の顔鈞に対する傾倒ぶりからみて、その存在が殿試を辞退す

る大きな理由となったことは充分に考えられる。近溪の顔鈞に対する心酔のさまは、同じく顔鈞に学んだ呉煥文の「紀遊」、曾守約の「心迹辨」(ともに『顔鈞集』附録)にも描かれている。

顔鈞は右の「自伝」に、さらに南京に赴いたと述べている。「逾三年、乃辞師祠、渡江入南都」というのが事実であれば、二十五、六年の頃になる。「自伝」には、南京では「訪会南雍、大司成程松溪諱文徳・少司成呂石諱懷、率監生四百衆、聽講六月」という。

南雍は南京国子監、大司成は祭酒、少司成は司業。

程文徳は陽明の門弟、講学派中の人物で、江西、吉安府安福県知県のときには復古書院を建て、後年の北京靈濟宮の講会にも名を連ねる。呂懷は、陽明の盟友である講学派の湛若水に学ぶ。

この頃は南京附近にも講会が盛んであり、二十五年には、程・呂は南京西方の全椒県に退職郷居していた戚賢を招き、博士弟子数百人を率いて旬餘の聚講をしている(『王龍溪先生全集』巻二〇「刑部都給事中南玄戚君墓誌銘」)。博士弟子とは、国子監生や府県学の生員を指すのである。顔鈞の講学もこのような学生を対象としたのである。

官僚が主催する講会には、官僚のほかに監生、生員も参会する。学校行政に関わる監察御史や提学使のほか、府州県官にも学校の監督責任があり、碩儒を招いて講義させることがある。後年、寧国知府のとき、近溪が王畿を招いたのもその例である。百数十人、数百人と講会の盛況が伝えられるのはひとつには当時の学生数の増加が背景にある。一例をあげれば、陽明と王畿の故郷の紹興では、明初に府学定員は八十名であったのが、嘉靖二十九年、学生数は七百餘人に達し、旧額の約九倍になっている(『季彭山先生文集』巻二「紹興府儒田記」)。学生は好むと否とに拘わらず、上からの官僚の呼びかけに応えて講会に参加することになるのである。大学としての国子監が設けられていた南京では、監生の参会もあった。

思うに、講会は官僚の職務の一端として行われる公的な性格が強いと

きは、府州県学や南京では国子監が利用されるが、私的な講会の際には、書院や寺観を利用するのであろう。南京の講学にも寺観を利用することがある。そのひとつの鶏鳴寺は南京国子監の東半里にあるといわれ、『金陵覽古』、監生の参会にも利便があったのが選ばれた理由と考えられる。

このようにみると、無位無冠の顔鈞の講学が国子監で行われたのが事実とすれば、顔鈞に対する高い評価があったことになり、注目してよい。先掲の自伝では、顔鈞とともに近溪がどの地点まで同行したかは明かでないが、顔鈞に徐学した呉煥文は、その点についてつぎのようにいう。

「時近溪羅子領春官薦、乃夫子之旧遊也。与夫子之心同之志同、遂登夫子之環車、而軒策不足以羈之、從容舒徐於吳越之地石城之都。司胄教者聽命如響、領春魁者若是其殷、陳院勛臣以及閭巷庶人之子弟、倚門聳耳、有不可以数千方紀、後車之盛、齊薛之金、信之鄒子輿之不誣也。時則夫子賸家幾六載矣、与近溪子言旋南城、過新城・金溪二邑、聞風而起者、猶夫薊都石城之盛。愚旧友一泉陳源、棄餘吳地、与其遊者期年。」〔紀遊〕、『顔鈞集』附録)

領春官薦は会試合格のこと。夫子は顔鈞。石城は石頭城ともいい、ここでは南京のこと。「陳院勛臣」「齊薛……不誣也」は未詳。陳源（一泉）は注15にみえる。

これによれば、近溪は顔鈞と終始同行し、南京から新城、金谿を経て南城に還ったことになる。このとき金谿では呉梯を訪ねた（同右「新城会罷過金谿吳宿疏山遊記」）。

ところで、顔鈞の「自伝」によれば、心齋祠から南京に至る從遊の間は三年以上に及んだことになり、呉の「紀遊」からみると、その期間を通して近溪は同行したことになる。しかしそのように考えることはできない。その理由としては、(一)本文に述べるように、二十四年、二十五年に郷里の南城や、近県の宜黄に講学したことを示す資料があること、(二)会試後三年以上も帰郷しないことは通常ありえないことがある。した

羅近溪講学紀年考 (一) (佐野)

がって、(一)「逾三年、乃辞師祠」に誤りがあり、二十四年頃に南京に赴いたか、(二)近溪は南京には同行しなかったか、(三)一旦帰郷ののちに一時南京に赴いたか、以上のいずれかであったとみられる。「自伝」からみると(二)の可能性が高い。

23 從姑山は南城市内にあり、近溪の講学処であった。当時の從姑山については『文集』卷三「從姑山遊記」。また明末清初の人で南城を訪ねた施閏章の『施愚山集』文集卷一五「盱江諸山遊記」を参照。

「始建從姑山房、以待講学之士。矢心天日、接引來学、足不入城市。」〔墓誌銘〕

24 「嘉靖丙午、余講学宜黄。」〔文集〕卷四「宜黄心大学墓誌銘」

25 近溪に数十人が同行したことは『文集』卷四「永新将母李孺人墓誌銘」にみえる。

この会を見聞した何心隱からの聞き書きにいう。「近溪会試中式後、不廷試而帰学十年。己偕数十友、自盱江趨吉州、印正於令祖暨南野双江諸老。維时会中同志数百人。諸老以近溪自建遠來、位在首座。令祖就質之曰、子不急仕進而帰学、十年于兹。其志卓矣。近所得如何。近溪作而对曰、只是一箇無。令祖莞爾晒曰、羅大人力学十年餘矣。如何在門外耶。」〔耿定向『耿天台先生文集』卷四「与鄒汝光」〕

令祖は鄒守益、汝光はその孫。建は建昌府。南野は歐陽徳の号、双江は聶豹の号。

「往吉安、謝山農顔公。因編訪双江聶公・念菴羅公・東廓鄒公・獅泉劉公、商榷学問。」〔盱壇直録〕下)

念庵は羅洪光の号、東廓は鄒守益の号。当時江南の各地には講会があり、書院も多かった。講学はとくに浙江・安徽・江西に盛行した。この期の講学については中純夫『王畿の講学』(富山大学人文学部紀要二六号)に、中心人物の王畿に視点を置いて詳述されている。

右に奉げられた人物は、江西、吉安府下における講学の中心的存在で

あり、鄒守益、羅洪先は退職家居し、聶鈞はこの頃一時落魄家居していた。(太子太保兵部尚書贈少保諡貞襄聶公豹墓誌銘)、『猷徵録』所収を参照)。右の耿定向の文では歐陽徳が講会に参加したという。講学好きで知られる欧陽徳は、この年、南京尚宝寺卿に任官しているが、官吏は陞遷に際して便道帰省などと呼ぶ一時帰郷をすることもある。

吉安ではこれらの陽明門弟や同調者による講学が各地にあり、また青原書院では府県を超えた広域の講会が開催された。中論文に挙げる書院のほかにも、吉安附近の冲玄あるいは玄潭と呼ぶところにも講会が開かれた。鄒守益が、顔鈞との師弟の縁を絶った陳一泉を大勇と評した(注14)のは、冲玄の講会でのことであり、二十八年、この講会に、聶鈞も参じている。「双江聶子偕諸君聚玄潭。」(『東廓鄒先生文集』巻九「冲玄録」)二十三年には、王畿を迎え、羅洪先、鄒東廓たちの会が催された(注33の羅洪先「甲寅夏遊記」を参照)。

なお近溪が参じた講会に何心隠も列坐していたことは、耿定向の文に続いて、「此梁狂為余述如此」とあることからわかる。梁狂は何心隠のこと、本名は梁汝元。

26 『盱江羅近溪先生全集』巻二に「且遇楚中高士、為論破易经、指陳為玄門造化。某竊心自忻快。此是天地間大道真脉、奚啻玄教而已哉」というのによる。この易学授受については、『近溪子集』樂集、『盱壇直銓』下、「墓誌銘」にも記事がある。

27 錢徳洪が南京に赴いたことは、『王陽明全集』の「年譜」二十九年の条を参照。王畿については、この年の記事と推定できる周怡の文章に、南京西方の全椒で会おうとの王畿の命に従おうとしたとあること(『訥翁先生文録』尺牘卷一)から、南京地域に赴いたことがわかる。

28 注25の中論文を参照。

王畿が二十七年から講学の旅途に上るのは、彼を辞職に追いやった張本人ともいわれる辛輔の夏言が前年に下野したことがひとつの契機になったと思う。王畿は夏言を講学嫌いと認識していた。「自訟長語示兒輩」

(『龍溪王先生会語』巻四)に、「時宰方作惡講学、乘機票旨、斥為偽学。小人旋加禁錮」とある。

講学や書院に対する政治規制がしばしば行われる。これらの規制は、万曆年間、張居正宰相時期の書院禁毀、講学規制がかなり徹底して実行されたほかは、かならずしも実効は挙からなかった。しかし、心理上の効果は大きく、王畿は夏言宰相時期には、講学活動に慎重な配慮をみせたと考えられる。

なお、王畿と帯同して講学することもあった錢徳洪については、戊申二十七年には「憂制未大祥」(胡直「困学記」、『明儒学案』所引)とも、この年「丁憂」(『劉子道統録』、『姚江書院志略』所引)ともいい、丁憂の時期は確定できないにしても、この頃服喪していたことが、出遊は二十七年以後になったことの理由であろう。

29 現在、吉安の南部に禅の七祖、青原行思の住地として知られる浄居寺があり、もと青原書院はこの寺域に設けられた。というよりは、当初は寺院の施設を利用した講会があり、これを青原の会、青原書院と称し、のちに万曆年間に会馆を山前に建て、はじめて仏寺と書院が分離したのである(『青原志略』巻七「羅大紘分修禅林講堂議」などを参照)。

仏寺道観に講会を催すのは通常にみられることであり、安徽の有名な水西書院も、もと仏寺での講会であったのを、のちに寺域内に書院を建て(注1の拙稿(二)を参照)、はじめは水西精舎と称した。このように書院が精舎と称することがよくみられるのは、仏寺を利用する集会であったことがひとつの理由である。

道観での講会としては、靈濟宮や冲玄観の例がある。靈濟宮は北京にあり、永楽帝が感じた夢徴にもとづいて建てられ、朝廷から使者を遣して毎年の祭祀を行っている(『帝京景物略』巻四「靈濟宮」)。大規模な講会にも適した施設があった。冲玄観は後述。

寺観の旧趾を利用したり、寺観を廢毀して書院を建設することもある。道観の例。安徽、広徳州の復初書院(『東廓鄒先生文集』巻五「広徳

州新修復初書院記」、揚州の維揚書院（『歐陽南野文選』卷四「維揚書院記」）。

仏寺の例。安徽、徐州府全椒県の南樵書院（『念菴羅先生文集』卷五「冬遊記」）、徽州府婺源県の紫陽書院（『東廓鄒先生文集』卷五「婺源紫陽書院記」）、福建、福州府の養正書院（『双江聶先生文集』卷五「重修養正書院記」）。

この理由としては、古い木材、煉瓦、屋根瓦の転用という経済的なこととのほかに、寺観が多くは山水の景勝の地や風水的観点からいう勝地佳地に置かれるという点が考えられる。

学校や書院の立地選定には風水への配慮を欠くことはできないといってもよい。吉安府安福県の講学処として知られる復古書院は、旧学の趾に建てられたが、「文峯挹其前、北華峙其後、午嶺踞其東、獅山蹲其西。而東北水之所洩、則蒙岡蔽其虧。煥煥乎、完完乎、不乎、翼乎、四方之勝咸萃焉」（『程松溪先生文集』卷七「復古書院記」）という地理からみると、この土地は到れり尽せりの風水勝地であった。

景勝の風水勝地での講会は、精神上も身体上にも好い影響が期待できる。これは講字のもつ環境として見すごせない。

30 龍虎山は江西、広信府貴溪県西南にあり、張道陵の古蹟で知られる、道教の上清派の中心的な道観太上清宮がある。この道士邵元節は嘉靖帝の寵愛をうけ、十八年に没して帰葬されると、墳塋の田地が下賜され、厚い披護をうけた。冲玄観は（冲元観とも書く）は太上清宮の東三里にある。大会開催のころは、山城は整備され、従者を含めれば多人数の遠来の参会者を迎えるには適しいところだったと思われる。

31 以下の記述は注25の中論文を参照。二十八年の大会は浙江派の重鎮、王畿・錢徳洪、江西派の重鎮鄒東廓・羅洪先が中心となり開催された。もともと積極的な王畿は、前年に羅洪先とともに開催地の選定に赴いた。ただし羅は大会には参加していない（『念菴羅先生文集』卷五「夏遊記」を参照）。

羅は、龍虎山を開催地としたことについて、「江西と浙江の道程はちよほど同じであり、朱陸の異同を融和した鵝湖は近くにある。楚越道理適均、而朱陸異同可合、鵝湖地近」（『同右』）といった。鵝湖とは江西、鉛山県にある鵝湖山のこと、朱熹と陸九淵が論争した故地。龍虎山のある貴溪県とは隣接している。

いま、羅たちの江西吉安から、王畿たちの浙江の省都、杭州までの道程を一般によく利用される駅伝路で計ると、吉安の螺川駅から贛江を下って南昌に至り、東に向って余干・安仁から貴溪までは七一〇里、貴溪からの広信府下の玉山に至り、省境を超えて常山へ至って信安江、東陽江を下り、建徳から桐江を下って杭州までは七二五里（『天下水陸路程』卷一の二、卷七の四により計算）となる。陸路は省境附近の玉山から常山までの八〇里に過ぎず、大半は水路を利用できる。龍虎山のある貴溪はこのように交通至便な地点に位置していた。

ここから、陽明学江西派と浙江派との間にみられる学説の違いを討論し折衷するために、両派が対等の立場で参会できる中間点に会場を設定したとわかる。

32 王畿の遠遊出講の軌跡をたどってみると、盛時には郷里よりはむしろ外地、とくに安徽江西に精力を注いでいたとの感さえ覚える。同府下の周汝登は、龍溪は十分の九は外地に在って、その家は旅舎のごとくであったと、見聞を記している。「予雖不得時侍左右、而間嘗過從。先生十九在外。問之云、住某地、以主会行、往某地、以訪友行。視其家、若郵伝然。有時在宅、則滿堂無非講学之人、滿座無非講学之語。今日過之如此、明日過之如此。他日偶然過之、無不如此。因思先生周流既無寧期、歸家又日聚友、豈真無一家事可関心耶。」（『東越証学録』卷五）

33 湖北では、黃州府黃梅県に趙貞吉を訪ねたことは次文からわかる。「龍溪から書翰が来て、前の約束（廬山で会おうとの約束）を重ねて申べ、間もなく廬山に到着したら知らせる、とあった。私は遠出のしごとが気がすまず、南に下ってくるようにと迎えに人をやった。また数日

すると、按察使司の官にある沈寵(古林)から書翰が来て、趙貞吉(大州)は黄梅の家に居て、龍溪とともに貴方を待ち、廬山の天池に十日ほど遊ぼうとしている。貴方はご自分の家に居るわけには行きませぬまい、とあった。龍溪書来、申前期、未幾報至匡廬。予倦遠役、遣人邀之南。又数日、沈古林憲使書云、趙大洲留家黄梅、与龍溪待公、為天池十日之遊、公安居得乎。(羅洪先「甲寅夏遊記」『陽明学大系』巻五所収。句読を改めたところがある。)

趙貞吉は四川に本貫をもつが、黄梅にも居住していた。

沈寵は寧国府宣城県の人、かねて王畿に学び、当時は黄州府下に按察使司僉事として駐在していた。この地にはほかに龍溪の知人が在官していた(『王龍溪先生全集』巻一六「別言贈沈思良」、巻二〇「沈母崔儒人墓誌銘」)。

当時の講学は、官僚としての任地において行い、また退職後にも在官時期の縁故や師弟関係を頼って出遊する。王畿の遠遊も知友縁故を巧みに利用している。全くの未知の地に伝道開拓するといった性格のものでなかったことはいうまでもない。羅洪先は王畿の講学が在地の官僚を巻きこんで行っていることを、口を極めて非難したことがある(『念菴羅先生文集』巻三「答王龍溪」)。ここには王畿講学のひとつの特徴をみることができる。

34 楽安県では、王良に学んだこともあり、のちにその年譜を編纂した董燧に迎えられた。「容山董公邀会案安。」(『町壇直録』下)

35 「墓誌銘」に「会案安、会宜黄。婦立義倉、創義館、建宗祠、置醮田、修各祖先墓、講里仁、会臨田寺」とある。義倉を立てるなどのことは、郷村や同族の間での治安維持、相互扶助に務めた事蹟ということだが、その事蹟があったとしても、一時に実現したとは考えにくい。

36 官僚としての陞遷の条件になる試験成績は、第三甲、同進士出身の六十六位であった。

37 徐階は前年、礼部尚書に加え、東閣大学士を兼務して入閣した。

徐階については、「及在政府、為講会於靈濟宮、使南野・双江・松溪分主之、学徒雲集至千人、其時癸丑甲寅、為自来未有之盛」(『明儒学案』巻二七、徐階伝)といわれ、この頃から徐階が宰輔に任じた隆慶初年までは、北京にも大規模な講会が行われた。講会処としてよく用いられたのが靈濟宮である。注11の中論文は三十二、三十三、三十七、四十四年の講会を指摘する。ほかに顔鈞が列した二十三年(注21参照)、三十五年(後述)がある。三十八年にも講会があったと推定できる。盧冠巖『盧子講存』に、「右嘉靖乙巳(三十八年)都下靈濟宮」との記事がありこの書は、靈濟宮での講説をもとにして語類体形式に編集したと考えられるからである。

このように、靈濟宮は講会の適所として、しばしば用いられたとわかる。

38 「時内閣徐存齋翁定会所於靈濟宮、夫子集同年、連同志、日至焉。」(『墓誌銘』)

『町壇直録』上に、(進士)同年、会試同年、旧同志、「数十百人」が参会したという。

39 進士は各官衙に配属されて事務を習得することがあり、親政進士ともいう。

「墓誌銘」に「季夏選太湖令」という。選任が正確に六月であったことは、同時代の李樂『見聞雜記』巻八に、九卿衙門での親政は三月二十日に配属され、六月二十日に選任をうけて任官することからわかる。

40 官僚としての事蹟は、注1の拙稿を参照。乾隆刊『太湖県志』巻七「秩官志・名宦」に羅汝芳を挙げる。

『町壇直録』下に、民兵を率いて盜賊を平定したことのほか、「復流移、修庠序、令郷館師弟子朔望習礼歌詩、行奨勸焉。立郷約、飭講規、敷演聖諭六言、惓惓勉人、以孝弟為先。行之期月、賦日完、訟日簡。閭閻頌声・台司薦疏、籍籍也。」という。

民兵を訓練したことは王時槐「近溪羅先生伝」(『近溪子集』附録卷一)、  
 県学の修復は乾隆刊『太湖県志』卷一四「芸文」所収、近溪撰「重修儒  
 学記」、郷約については四十八歳の条を参照。

41 注18所引の文章を参照。

42 在京官は六年毎、在外官は三年毎に北京で官僚としての勤務成績査定  
 をつける。これを朝覲、入覲、来覲などという。

43 「被近溪合太湖、入覲、忽遇江東門。苦扳同旱程、叙問闊。鐸不忍堅  
 拒、隨至北畿。時徐少湖名階、為輔相、邀鐸主会天下来覲官三百五十員  
 於靈濟宮三日、越七日、又邀鐸陪赴会試举人七百士、亦洞講三日。如此  
 際会、兩次溢動。湖公喜信、私邀鐸与近溪・吉陽、尽日傾究、豈期及筵。  
 朝仕駢至湖公庭、湖公出庭周施、底暮入座西城。又促去。良可慨也。」  
 (『顔鈞集』卷三「自伝」)

吉陽は何遷の号

ここでは顔鈞は徐階の主催する講会に列席したことをいう。北京にお  
 いて講学好きの高官が推進する講会ともなれば、多数の参会があった。

近溪がこの時機に徐階の周辺に居たことは、師弟の縁故があったこと  
 からみても当然である。顔鈞に忠実に師事した程学顔はこの時の試験に  
 下第し、近溪を通して顔鈞を知ることになったのだが、その伝に「丙辰  
 赴会、不第。会羅太湖汝芳引耕樵、夜談靈濟宮五七榻」(同右「程身  
 道伝」とある。

44 知臬正七品から在京官の主事正六品に陞任。

45 この年、胡直は進士に登第、翌年刑部主事に任官する。耿定向も同年  
 の進士。近溪と終生親交のあった耿は、胡直を通して近溪を知ったと推  
 定できる。近溪はその頃には、胡・耿のほか、劉応拳、鄒善(守益の子)  
 や何心隠とも交わっている。劉は後年、万曆の書院講学の規制が行われ  
 た時機にも講学を続けたといわれ、近溪と同じ頃、雲南に在職したこと  
 もある(『耿天台先生文集』卷二「明福建提刑按察司按察使劉公墓誌  
 銘」)。胡直の主事任官時期は『衡廬精舍藏稿』卷二〇「折行久任疏」を

参照。

耿定向の周辺には、何心隠、錢同文、程問、程学顔など王良の学を知  
 る人びとが居たという(『耿天台先生文集』卷八「都邸邇言」)。近溪は、  
 このような人びとと交流していたと考えられる。

46 この年の靈濟宮講学については注11の中論文にみえる。近溪が参会し  
 たことは、講会でその人となりを知った人物の伝記を書いていることか  
 らわかる。「嘉靖戊午、余官比部。案安訥齋詹公、以四川邛州学正起服  
 来京。同諸縉紳談学于靈濟・広慧之間。余見公之向往真切、議論懇至、  
 奮然以道己任、因數過往。」(『文集』卷四「詹訥齋伝」)

この年、徐階を盟主として講会を催したとされる何遷が顔鈞、近溪と  
 交流があったことは、注43の顔鈞「自伝」にもみえる。徐階、何遷の講  
 会には近溪も一翼を荷ったであろう。なお、顔鈞は何遷のために寿序を  
 書いたこともある(『顔鈞集』卷二「寿吉陽七十一生辰序」)。

以上に折にふれて叙述したところからみても、顔鈞は孤立した存在で  
 はなく、嘉靖期の講学活動の一翼を荷っていたことがわかる。

ところで、顔鈞のちに投獄されたのは、「淮安の官船を盗売した」  
 との理由による(同右卷三「自伝」)。このことについては、講学のため  
 に官舟を望んだ顔鈞に、何遷が自分の舟を与えたところ、それが官舟盗  
 用とみなされたのだとの説がある(楊天台『泰州学派一〇五頁所引「永  
 新県志」)。この説が事実としても、何遷が官舟を貸与することは両者の  
 親密な関係からすればあり得ることであり、盗用とは明かに不当な嫌疑  
 であった。

47 耿定向は、「余憶戊・己年前、近溪談学、见人齒及片語経書陳言、即  
 為棒喝。」(『耿天台先生文集』卷三「与周柳塘」という。

戊己は戊午三十七年、己未三十八年。

近溪が自己の立場を「無」と表現したことは三十三歳の条にみえる。  
 任官ののちにも仏教に親しみ、兒子とともに楞伽経、法華経などを誦  
 している(『文集』卷四、「三子小伝」)。近溪と仏教思想については荒木

見悟先掲書を参照。なお若い日の近溪は仏僧の笑巖徳芳に参じたとの説もあるが(荒木見悟『雲棲株宏の研究』一一一頁)。参学は後年のことと考ふる(続稿)。

48 刑部の職務上、沈鍊に関する事件の餘犯処断を命ぜられた。『盱壇直銓』下に詳しい。

49 「墓誌銘」による。『盱江羅近溪先生全集(卷七「泰山丈人」には癸丑(三十二年)のこととする。兩年ともに臨清を経出したと考えられるが、いまは前者に従う。丈人の教示内容は『文集』卷二「泰山丈人」に詳しい。

50 官僚は任期満了(京官は六年)に伴って帰省を許可されることがある。万曆『大明会典』卷五「給假」を参照。

51 「墓誌銘」、「盱壇直銓」下ともに「学者大集」と記す。「大会」とは書き分けているのは、親睦を目的とする会合であったともみられる。

戯曲作家として名高い湯頭祖は、この頃の見聞を述べている。「盖予童子時、従明德先生遊。或穆然而咨嗟、或熏然而与言、或歌詩、或鼓琴。予天機冷如也、後乃畔去。」(上海人民出版社『湯頭祖集』一〇三六頁「太平山房集選序」)

湯の従学は「秀才説」(同一二六六頁)によれば十三歳のとき、四十年のこと。湯は近溪の故郷南域に隣接した臨川の人。年令からみて在郷の近溪のもとへ来遊したのである。これを四十年とするのが正しければ、近溪は四十年から翌年にかけて帰省したのである。

ここで注意されるのは、「黙りこんで嘆息する者もあり、ほろ酔い気分て語り合う者もあり、歌う者もあり、琴を鳴らす者もいた」のは、親睦の集いであったとしても、ここから近溪の講学の雰囲気窺えることである。講会はこのような自由気ままな解放的な場合もあったのではないか。これは近溪に限ったことではない。

王陽明が扇を使うことを遠慮する門人に、聖人の学は道学先生の生き方にみるような窮屈なものではなく、狂者は狂者なり、狷者は狷者なり

りの個性を尊重するのだと教えた有名な逸話(『伝習録』下「王汝中・省曾侍坐」)には、陽明の自由な個性重視の教育方針が示されている。初学者の倫理教育書である『小学』にも師弟の上下差別を厳格に説くのに対し、陽明のもとでの師弟関係が和気藹瀾としてなごやかものであったことは、陽明の「年譜」四十二歳、潯陽での講学、五十三歳、天泉橋での会合、「明儒学案」卷一九、魏良弼法にみえる王畿入門の逸話などによって知ることができる。

このような自由解放的な雰囲気は、いわゆる泰州学派の王良にもみられ、また王良に学んだ陶工、韓貞の講学は、農閑期に船を浮べ、興にまかせて歌を唱いながら各地を巡回した(先掲耿定向「陶人伝」)。

近溪の講学も身分の上下を問わない、解放的な雰囲気をもっていったのと思われる。これが人びとを講学に引きつけた一因であろう。門人の楊復所は講学の盛況をつぎのようにいう。

「近師生平徒足所至、便集百十人、多至数百人。絶未嘗有意於約戒号召之、而莫知其所由然也。」(『楊復所家藏文集』卷七「管東溟」)

いまひとつ注意したいのは、右にみるように講学にはしばしば歌唱を伴うことである。

書院の規約などには講会に先立つ儀礼に際して『詩経』の詩などを唱うことがある。しかし当時の講学では歌唱は儀礼としての形式にとどまらず、情性を涵養するためにもよく用いられた。陽明が児童教育に歌唱を重視したことは、「教約」(『伝習録』卷中)にみられる。王畿の講学もしばしば歌唱を取りいれている。近溪は、寧国に王畿を迎えたときに、まず歌童に命じて音楽の演奏、合唱を行わせている(注61参照)。

52 「集」山羅公・合溪万公・少魯劉公・見羅李公・魯深徐公輩、日夕聚論、商榷理學。」(『盱壇直銓』下)。

李材はこの年の進士、近溪の寧国赴任に際して文章を書いている(『贈羅惟徳守寧国序』(『観我堂稿』卷二))。みな官僚の任用まちの暇に談論したのである。



- 53 知府は正四品の官、京官の主事から知府への転出は、順当な陞任である。注1の拙稿(一)を参照。
- 万曆初年の宰輔、張居正とは耿定向とともに交誼があり、赴任に際して送序を贈られた。中純夫「張居正と講学」(富山大学教養部紀要第二五卷一号)に詳しい論述がある。以下全般に参照。
- 54 寧国では士民に「孝順父母、尊敬長上」を教えたと(「盱壇直銓」下)。これは郷約に用いる聖諭の一部である。近溪が寧国に郷約を行ったことは、酒井忠夫『善書の研究』第一章を参照。
- 55 注1の拙稿(一)を参照。のちに施潤章が知った近溪寧国在官時の事蹟は、『施愚山集』文集卷二二「修盱江羅明德祠記」にみえる。
- 56 注53の中論文を参照。
- 57 胡清虚と王畿や近溪一家との関りについては拙稿「明代知職人の一側面」(東海学園女子短期大学 国語国文42号を参照)。
- 58 この年、耿定向は南直隸提学使になる。『耿天台先生文集』卷二「患病比例乞恩放回調理疏」に「嘉靖四十一年四月、欽依改差南直隸提督学校」とある。按察使司には按察使の下に複数の副使を置き、その中に学政を専管する副使があり、これを提学使とか提督学校とか称することがある。文教行政を任務とする提学使の動向は、講学の消長とも関わりをもつ。定向の着任は講学好きの近溪にとって好都合だった。
- 提学使は所管の府県を巡回する。寧国に来遊したのは、四十二年のこと。このとき、かつて東南海辺に倭寇対策に任じて絶大な権限を振った胡宗憲が、罪を問われて獄死し、棺は故郷に帰葬される途中、寧国まで来たところで放置されてしまったのを見て祭りをやっている(同右巻一一「祭梅林胡先生文」)。
- 因みに、寧国府城のある宣城の西門には、後年の見聞によると、非命に死する者、獄死した者の屍体を放置する所があったという(『施愚山集』文集卷一三「瘞暴棺記」。嘉靖の当時から存在していたのだろうか。
- 59 『何心隱集』附録、解文炯「梁夫山先生遺集序」を参照。
- 60 志学書院は、寧国府治宣城東北に設けられた。万曆『寧国府志』卷九「学校」に「嘉靖甲子、提学御史耿定向・知府羅汝芳・推官李惟観建」とある。甲子は四十三年、耿が関ったとしても来遊は前年であり、書院完成が四十三年のことと考えておく。
- 61 寧国府にはこの頃盛んに講会が催され、府下涇県の水西書院には、王畿、錢德洪は定期的に出講した(注25中論文を参照)。水西書院における講学の経過は、『施愚山集』文集卷二二「修葺水西書院記」にも記述がある。
- この年の講会について、王畿は、「甲子春暮、予以常期赴会宛陵。侯大集六邑之士友長幼千餘人、聚于至善堂中、先命歌童举楽合歌、以興衆志。」(『王龍溪先生全集』卷二「宛陵会語」という。
- 62 この頃の見聞に依るのだろうか。王畿は近溪の教説が因果応報の説に及ぶと指摘する(同右巻一一「与羅近溪」)。近溪の因果輪廻観については、注7の拙稿を参照。
- また涇県の査鐸も、寧国での近溪は葱嶺に借口したこと、つまり仏教的な言説を借りたことを述べる(先掲荒木見悟『明代思想研究一四五頁を参照)。
- 63 南京では耿定向を迎えられ、明道書院で講学する。参会者としては次の姓氏が挙げられている。蔡国珍、劉応峰、蔡悉、顧闕、周希旦、張燧、曹允儒、管志道、李天植、李登、楊希淳、焦竑、吳自新、金光初、郭忠信、吳礼卿。『盱壇直銓』下)。
- この年の明道書院の講会については、荒木見悟『明末思想研究』三九頁以下を参照。
- 64 王畿は、徐階が大会の開催を命じたという。「公首命述職諸司及計偕諸士凡同志者、先後大会於靈濟宮。」(『王龍溪先生全集』卷一五「跋徐存齋師相教言」)
- 述職諸司は朝覲入京の官僚、計偕諸士は会試・応試の士。

この文が四十四年についていうことは、教言とは、この年の徐階の教説を近溪が編集した書であることからわかる。

途絶えていた靈濟宮の大会がこの年開催されたのは、上京した近溪の働きかけが力になったと考えられる。「墓誌銘」に「入観。徐存齋翁詢時務。対曰、人才為急、欲成人才、其必由講学乎。翁是之、遂合同志、大会靈濟宮」とある。すでに中堅官僚であった近溪は、大会開催を主として推進できる地位にあった。

「徐政府手書程子定性一書学者先須識仁一条、令長子携至会所。兵部南離錢公出次朗誦、諸公懇師申説、師亦悉心推演、聴者躍然。詳見靈濟宮会語。」(『盱壇直銓』下)

このときの状況を『明書』巻一一四は、「汝芳妮妮發明、音吐洪暢、興起者不可勝数」という。

『靈濟宮会語』が作られたことは、『文集』巻首「羅明德公書目」にも記載がある。

ここで講学資料である会語について述べておく。

講学の際に、会語を編むことがある。碩儒を招請した講会であれば、その講説内容だけを筆録することもあるだろうが、共同討論の講会では諸人の発言を列記することが考えられる。

講会の生の資料であるいわば原会語は、現存しない。現在知られる会語と題される資料は、原会語を抄録したものか、特定の人物の発言だけを集録したものと推定できる。

『明儒学案』巻一一、錢德洪の項に、「会語」を引用している。これはいくつかの会語から錢の発言を集録したのだろう。これとは別に、『青原志略』巻三に「惜陰会語」から錢の語を一条引用している。

龍虎山冲玄観の大会記録として、王畿の「冲元会紀」が知られている。これは大会の生の記録ではなく、講会での王畿の発言だけを抄録したものである。当初は諸人の語を記録した会語を作ったことは、この時に参加できず、のちに鄒守益から「会語」一冊を示された羅洪先が、「諸君

遠近より至り、士友發明するところ多し。而して龍溪の条析詳甚」(『念菴羅先生文集』巻五「夏遊記」というところからわかる。王畿の発言が詳甚だとしても、ほかの士友の發明した語も載っていたのである。鄒が、論敵でもある王畿の発言だけが載った「会語」を、羅に示すことはありえない。羅が引用して論評する王畿の語は、「冲元会紀」と序次は異なり、字句にいくらかの異同があるのは、羅の方が「会語」の原文に近いと考えられる。

共同討論の講会での論題は、当時の思想課題を取りあげるだろう。碩儒の講義であっても、思想課題からかけ離れたものではないから、一般に言えば、会語などの講学資料を通して、当時の思想界の問題関心を知ることができはるはずである。

会語などの生の資料は、後年編集しなおされ、語録形式になり、個人の教説として保存されるようになる。近溪についていうと、会語などから、講学の雰囲気や幾分残した『近溪子集』が編集され、さらに教説の集成といった性格の濃い『盱江羅近溪先生全集』へと再編集される(注5の拙稿を参照)。

講学を考えるには、原会語における討論対話形式から、現存する文集全集にみる教説形式へという、資料上の性格の変化にも配慮する必要がある。

65 『盱壇直銓』下に「朝観の事が終ってから、師は府に還った。観事竣、師還郡。」とある。

朝観入京に際しては、ふたたび任地には帰らないよう準備することが一般に行われている。近溪が寧国知府に再任されたことを明言する資料はないが、新しく任命された知府のいる旧任地に立ち寄ることはありえないことで、府に還ったというのは再任されたことを意味する。